

書評

保護室の実態と役割

【評者】 中山 茂樹

千葉大学大学院工学研究科 教授／建築・都市科学専攻

三宅 薫(著)

『行って見て聞いた 精神科病院の保護室』

保護室は、精神科治療プロセスにおける重要な環境として位置づけられている。厚生労働省の「医療観察法下の行動制限等に関する告示」は、患者の隔離についての基本的な考え方を「患者の症状からみて、本人又は周囲の者に危険が及ぶ可能性が著しく高く、(中略)その危険を最小限に減らし、患者本人の医療又は保護を図ることを目的として行われるもの」だと示している。しかしこれまで、この空間への施設性能として求められてきたものは、自殺防止への配慮や、耐破壊性能が中心であり、治療的環境を達成しようとする議論には至っていなかったように見える。また、たたずみ・就寝・休息・食事・排せつの行為空間が一体となっていること、室内の空間性状条件、外部空間との関係や、窓からの景観などに対する具体的設計指針が医療側から示されていなかったことなど、治療環境を建築計画としてどのように創造すべきなのか明らかではなかった。

著者は「保護室を治療・看護に積極的に生かす」とし、保護室は治療・看護のための空間であることを主張しておられる。また、巻末にある中井久夫神戸大学名誉教授のコメントにも「精神病院は最大の治療用具である」というエスキロールの言葉が引用されており、医療・看護の領域から、建築空間を単なる器ではなく、治療に直結するものであることをご指摘いただき、建築に身を置くものとして、その重みを深く受け止めた。

冒頭に「突然大学から膨大な質問用紙が送られてきて、記入させられるような調査」ではなく、「自分の足や目や耳を使って、現場の情報を集めていきたい」と思ったという、著者の姿勢が示されている。35病

院40病棟の平面図と保護室鳥瞰図、それに細部の写真が見開きで紹介されている。具体的な各病院のアメニティの使い方は詳細なコメントとして記録されている。また後ろに「保護室における生活援助とは」がまとめられており、看護のさまざまな工夫が列挙されており、建築への注文も多数記載されている。

困ったこととして指摘されている「換気や明るさ、騒音などについての客観的な基準がない」や、「壁の硬さも、やや硬いとか、柔らかいとか、ふかふかとか、手触りを表現する基準がわからない」のは、使う人々へのデリカシーが建築には欠如していると指摘されているようで耳が痛い。本書にヒントとして隠されている重要視点を、建築の言葉に変え、図面化し、具体的な空間にするのは建築家の仕事である。

精神科医療者の方にはもちろん、病院管理・設備などに携わる人にも、建築設計者にも読んでほしい。



A4 頁152 2013年
定価2,940円(本体2,800円+税5%)
ISBN978-4-260-01743-5 医学書院刊